〔駒沢女子大学　研究紀要　第17号　p. 49 ～ 65　2010〕

駒女大生の学生生活と社会意識――首都圏６大学比較調査から

榎　本　　環*

Komazawa Women's University Students, their Campus Lives and Social Consciousness : from a comparative survey of 6 universities in Tokyo area.

Tamaki ENOMOTO*

Abstract

This paper attempts to overview the Komazawa Women's University students' campus lives and their social consciousness through a comparative survey conducted in 6 universities in Tokyo area, and to clarify their traits.

It reveals that Komazawa Women's University students, in general, spend comparatively longer minutes in attending school. Not necessarily deeply involved in the academic activities, however, they are satisfied with the lectures. They attach most importance to build up rich friendship and human relations. They show lower interests in club activities, on the other hands, higher commitment to virtual communications on SNS. They tend to show modest attitude to consumption on fashion commodities. They are reluctant to study abroad, however, understand enough the necessity of studying foreign languages. No peculiar difference has been detected, with some exceptions, in public moral conscience, social value conscience, self-confidence, and estimation of social situations.

１．調査の目的と実施概要

駒沢女子大学の学生はどのような学生生活を送り、どのような社会意識をもっているのだろうか。調査データに基づき、それらについて基礎的な理解を得るとともに、他大学の学生と比較した場合の一般的な特徴を把握してみたい。この目的のもと、本稿では、筆者が中心となって独自に実施した調査票調査のデータに依拠しながら、調査結果の分析を試みる。

おもに取り上げるデータは、「首都圏大学生の学生生活に関する比較調査」（以下では「Ａ調査」と略称する。注記がない限りこれを「本調査」と称することにする）によるものであり、これに、「大学生の学生生活に関する調査、2007年10月」（以下では「Ｂ調査」と略称する）のデータを補足的に用いて分析に加えることにする。これら２つの調査の概要は以下のとおりである[1]。

*人文学部 人間関係学科

1　両調査に共通して調査項目および各設問は、「調査主体」に示した各授業の履修学生と筆者が共同作業により作成した。本稿では、筆者が単独で作成した調査項目および各設問を中心的に取り上げて分析する。なお、調査票の原本と単純集計結果については紙幅の制約上、掲載を省略する。

「首都圏大学生の学生生活に関する比較調査」

調査対象：首都圏６大学（早稲田大学、武蔵大学、法政大学、都留文科大学、専修大学、駒沢女子大学）の学生

調査方法：自記式による調査票調査

調査項目：基本属性（所属大学、性別、学年、出身地）、自宅通学・自宅外通学の別、通学時間、大学生活の重点、授業コマ数、当該学期の履修全科目数に占める専門科目の割合、週間の平均課題数、授業中の集中度、授業への出席率、授業外での学習時間、授業への満足度、授業への不満内容、サークル所属の有無、所属サークルの分野、サークル活動への参加頻度、携帯電話の所有有無、携帯メールの送信頻度、携帯電話の発信頻度、携帯電話の利用月額、車内マナー習慣（マナーモードの設定、車内での着信対応、車内での飲食、席譲り）、駅周辺の駐輪マナー意識、職業観（やりがいと私生活のバランス、許容就労時間、進路選択に対する関心度、希望業種・職種、職業意識）、社会意識（納得の生き方、人助け意識、革新志向、権威主義、協調志向、安定志向）、社会肯定評価、自己自信感

実施方法：集合調査法（上記６大学における筆者の担当授業のなかから各大学１科目を任意に選び、授業時間内に教場にて実施）

＜第１回調査＞

調査主体：早稲田大学理工学部複合領域科目「社会調査法」受講者一同・榎本環（授業担当者）

実施時期：2006年11月13日～22日

回収結果：配布総数162票、回収票154票（回収率95.1％）、有効票150票（有効回収率92.6％）

＜第２回調査[2]＞

調査主体：駒沢女子大学人文学部人間関係学科「調査の実際」受講者一同・榎本環（授業担当者）

実施時期：2007年10月４日～23日

回収結果：配布総数41票、回収票39票（回収率95.1％）、有効票38票（有効回収率92.7％）

「大学生の学生生活に関する調査、2007年10月」

調査対象：首都圏３大学（専修大学、東京女学館大学、駒沢女子大学）の学生

調査方法：自記式による調査票調査

調査項目：基本属性（所属大学、性別、学年、居住都県）、自宅通学・自宅外通学の別、日常生活における音楽への接し方、携帯電話の利用状況、ブランド品への消費意識、海外生活への関心度、いじめに対する意識、消費行動、交友活動

実施方法：集合調査法（上記３大学における筆者の担当授業のなかから各大学1科目を任意に選び、授業時間内に教場にて実施）

2　第１回調査では上記６大学のうち、駒沢女子大学を除く５大学の学生を対象に実施し、第２回調査では、同一の調査票を用いて駒沢女子大学の学生を対象に実施した。

＜第１回調査＞
調査主体：東京女学館大学2006年度秋学期「社会調査法演習」受講者一同・榎本環（授業担当者）
実施時期：2006年11月～12月
回収結果：配布総数171票、回収票163票（回収率95.3％）、有効票160票（有効回収率93.6％）
＜第２回調査[3]＞
調査主体：駒沢女子大学人文学部人間関係学科「調査の実際」受講者一同・榎本環（授業担当者）
実施時期：2007年10月
回収結果：配布総数105票、回収票92票（回収率87.7％）、有効票89票（有効回収率84.8％）

２．調査対象者の属性について

調査対象となった６大学のうち、都留文科大学は山梨県都留市を所在地とする公立大学であるが、それ以外の５大学、およびＢ調査の対象に含まれる東京女学館大学については、いずれも私立大学であり、東京都心またはその近郊を所在地（これらの調査が実施されたキャンパス）とする点で共通している。

本調査（Ａ調査）について、調査対象者の性別と学年を所属大学別に表すと次の２表のように示される。性別（表１）を対象者全体でみると、男性32.4％に対して女性67.6％と、女性が７割を占めているが、本稿が考察対象に据える駒沢女子大学の学生が、指摘するまでもなく全員、女子学生であることを踏まえると、以下の考察に際しては、他の５大学がすべて共学校であり、男子学生による回答も含まれている点に注意を払う必要がある[4]。

学年構成をみると（表２）、法政大学および都留文科大学についてはやや趣を異にするものの、

表１　所属大学と性別のクロス表

			性別		合計
			男	女	
所属大学	早稲田大学	度数	18	1	19
		所属大学の％	94.7%	5.3%	100.0%
	武蔵大学	度数	12	18	30
		所属大学の％	40.0%	60.0%	100.0%
	法政大学	度数	7	12	19
		所属大学の％	36.8%	63.2%	100.0%
	都留文科大学	度数	7	30	37
		所属大学の％	18.9%	81.1%	100.0%
	専修大学	度数	17	28	45
		所属大学の％	37.8%	62.2%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	0	38	38
		所属大学の％	.0%	100.0%	100.0%
合計		度数	61	127	188
		所属大学の％	32.4%	67.6%	100.0%

3　第１回調査では上記３大学のうち、専修大学および東京女学館大学の学生を対象に実施し、第２回調査では、同一の調査票を用いて駒沢女子大学の学生を対象に実施した。
4　学生生活の諸相は性別、あるいは女子大・共学校の別によって違いがみられる可能性があり、単純に所属大学を変数としてそれらを比較対照することには一定の制約が含まれると考えられる。

表２　所属大学と学年のクロス表

			学年					合計
			1年	2年	3年	4年	5年以上	
所属大学	早稲田大学	度数	0	14	4	1	0	19
		所属大学の％	.0%	73.7%	21.1%	5.3%	.0%	100.0%
	武蔵大学	度数	0	17	7	5	1	30
		所属大学の％	.0%	56.7%	23.3%	16.7%	3.3%	100.0%
	法政大学	度数	6	4	7	2	0	19
		所属大学の％	31.6%	21.1%	36.8%	10.5%	.0%	100.0%
	都留文科大学	度数	16	10	8	3	0	37
		所属大学の％	43.2%	27.0%	21.6%	8.1%	.0%	100.0%
	専修大学	度数	0	23	17	2	3	45
		所属大学の％	.0%	51.1%	37.8%	4.4%	6.7%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	0	6	26	5	1	38
		所属大学の％	.0%	15.8%	68.4%	13.2%	2.6%	100.0%
合計		度数	22	74	69	18	5	188
		所属大学の％	11.7%	39.4%	36.7%	9.6%	2.7%	100.0%

２年生と３年生が構成の７割以上を占めている。本稿の問題関心に照らし合わせるならば、学生生活４年間の中葉期にある２～３年生に照準が当てられていることは適切であるといえよう。

ちなみに、本調査（Ａ調査）の対象６大学学生について、集合調査の実施対象となった該当科目（調査対象者の出席授業）の詳細は以下のとおりである[5]。

早稲田大学　　理工学部複合領域科目（基礎科目）「社会調査法」
武蔵大学　　社会学部専門科目「産業社会論」
法政大学　　現代福祉学部総合教育科目「職業の世界」
都留文科大学　文学部比較文化学科専門科目「資料調査法Ⅱ」
専修大学　　文学部人文学科専門科目「社会学特殊講義Ⅶ（資料・データ分析基礎）」
駒沢女子大学　人文学部人間関係学科専攻科目「調査の実際」

これらのうち、早稲田大学の対象者は理系の学生である点に注意が必要である。それ以外の５大学（およびＢ調査の東京女学館大学）については、本格的な専門科目を学びつつある文系学生が、その典型的な対象者像としてイメージされるといえよう。

３．学生生活の諸相

本調査（Ａ調査）の対象者について自宅通学・自宅外通学の別を所属大学別に表すと表３のように示される。駒沢女子大学（以下「駒女大」と略称）の学生は、自宅通学者71.1％、自宅外通学者（実家以外のアパート・寮・下宿など）28.9％と、自宅通学者が7割を占めている。この割合は他の５大学とおおむね同様の傾向にある[6]。

通学時間を駒女大と調査対象内の他５大学との間で比較してみると、図１のように示される。駒女大の学生は概して長時間通学者の割合が多く、片道90分と回答した者の比率が36.8％に達し、

5　これらは、いずれも調査実施時における情報である。
6　都留文科大学は、教員養成課程に伝統があることもあり、所在地である山梨県内の地方都市（人口３万５千人）に全国各地から学生が入学を機に転入するという事情があり、対象者のなかでは特異ケースであるといえる。

表３　所属大学と自宅通学・自宅外通学の別のクロス表

			自宅通学・自宅外通学の別		合計
			自宅通学	自宅外通学	
所属大学	早稲田大学	度数	12	7	19
		所属大学の％	63.2%	36.8%	100.0%
	武蔵大学	度数	26	4	30
		所属大学の％	86.7%	13.3%	100.0%
	法政大学	度数	13	6	19
		所属大学の％	68.4%	31.6%	100.0%
	都留文科大学	度数	4	33	37
		所属大学の％	10.8%	89.2%	100.0%
	専修大学	度数	22	23	45
		所属大学の％	48.9%	51.1%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	27	11	38
		所属大学の％	71.1%	28.9%	100.0%
合計		度数	104	84	188
		所属大学の％	55.3%	44.7%	100.0%

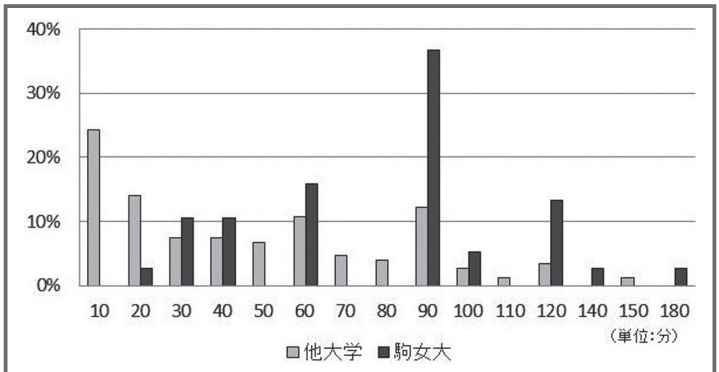

図１　通学時間（片道）

120分の回答も13.2％に及んでいる。また、自宅外通学者の大半が含まれていると思われる、比較的短時間の通学者のケースでも、他大学の場合、20分以下の回答が全体の38.3％を占めるのに対して、駒女大の場合、同比率は2.6％に過ぎず、30～40分の回答が合わせて21.0％に達する[7]。駒女大の学生の場合、この、通学に総じて長時間を要するという事情は、以下にみる学生生活の諸相に対して根底的な規定要因となっていることが考えられる。

図２は大学生活の重点に関する回答をまとめたものである。質問文と選択肢は以下のとおりである。

Ｑ６：あなたは大学生活の中で、現在、どのようなことに最も重点をおいているとお考えですか。（１つ選択）

１．勉強や研究を第一においた生活

7　各大学の立地場所や近隣地域の住宅事情、通学に要する交通機関の事情なども考慮に入れる必要があり、通学時間は必ずしも単純に通学距離を反映しているとは限らない。

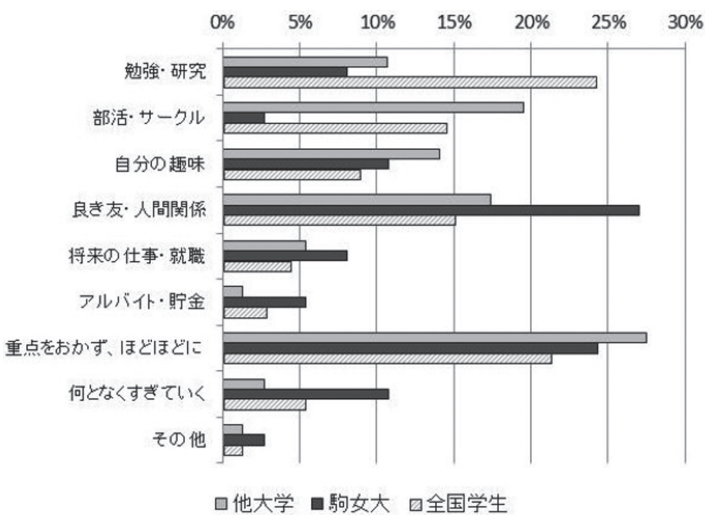

図２　大学生活の重点

２．部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活
３．自分の趣味（車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等）を第一においた生活
４．良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた生活
５．将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学外の学校に通うことを第一においた生活
６．アルバイトをしたり、お金をためたりすることを第一においた生活
７．特別に重点をおかず、ほどほどに組合せた生活
８．何となくすぎていく生活
９．その他（　　）

この設問は、全国大学生活協同組合連合会「第39回学生生活実態調査、2003」[8]（全国大学生活協同組合連合会2004）における該当設問と質問文・選択肢を共通化させることによって、本調査のデータを全国学生のデータと比較することが可能になるよう設定した。

図２を駒女大生についてみると、「良き友、人間関係」の回答が27.0％で最も高く、「重点をおかず、ほどほどに」が24.3％でこれに次ぎ、両者を合わせると過半数に達する。いっぽう、他大学の場合は「重点をおかず、ほどほどに」が最も高く（27.5％）、「部活・サークル」（19.5％）、「良き友、人間関係」（17.4％）と続く。ちなみに全国学生についてみると、「勉強・研究」が24.2％と最も高く、「重点をおかず、ほどほどに」（21.3％）、「良き友、人間関係」（15.0％）と続く。駒女大生の場合、他大学、全国学生と比べて、「良き友、人間関係」の回答が第１順位にのぼり、また、「何となくすぎていく」の比率がやや高く（10.8％）、「部活・サークル」の比率が2.7％ときわめて低いのが特徴的である。

8　調査主体：全国大学生活協同組合連合会、2003年10月実施、調査対象：全国74大学の学生、回収サンプル数15,542票、回収率34.9％。

学生生活の諸相について、より立ち入って分析してみよう。図２の結果に関連して、表４は授業（専門科目）への出席率を、表５は授業中の集中度（質問文：Q10「あなたは、授業中に居眠りや携帯いじり、他の授業の『内職』などをすることがありますか」）を、それぞれ駒女大と他大学とのあいだで比較したものである。授業参加の現状に関して、いずれも際立った差異はみられない[9]。

授業外での学習時間（予習・復習や課題なども含める）を駒女大と他大学とのあいだで比較してみると表６のように示される。対象者全体でみると67.2％の学生が30分程度以下の学習時間にとどまっている。駒女大生の場合、学習時間がやや短い傾向にあると窺われが、この差異は誤差の範囲内におさまるものである[10]。

図２および表４～６の結果をみると、対象者全体に関して学業活動には、学生生活のなかでこと

表４　所属大学と授業（専門科目）への出席率のクロス表

			専門科目の出席率					合計
			4割未満	4～5割	6～7割	8割以上	ほぼ100%に近い	
所属大学2分	他大学	度数	1	5	17	57	68	148
		所属大学2分 の %	.7%	3.4%	11.5%	38.5%	45.9%	100.0%
	駒女大	度数	1	0	7	15	15	38
		所属大学2分 の %	2.6%	.0%	18.4%	39.5%	39.5%	100.0%
合計		度数	2	5	24	72	83	186
		所属大学2分 の %	1.1%	2.7%	12.9%	38.7%	44.6%	100.0%

表５　所属大学と授業時間内の集中度のクロス表

			「授業中に居眠りや携帯いじり、他の授業の内職などをすることがありますか」			合計
			ない（いつも集中）	ときどきある	頻繁にある	
所属大学2分	他大学	度数	7	86	55	148
		所属大学2分 の %	4.7%	58.1%	37.2%	100.0%
	駒女大	度数	1	23	13	37
		所属大学2分 の %	2.7%	62.2%	35.1%	100.0%
合計		度数	8	109	68	185
		所属大学2分 の %	4.3%	58.9%	36.8%	100.0%

表６　所属大学と授業外での学習時間のクロス表

			授業外での学習時間（含む予習・復習、課題）					合計
			ほとんどしない	30分程度	1時間台	2時間台	3時間以上	
所属大学2分	他大学	度数	64	33	32	13	7	149
		所属大学2分 の %	43.0%	22.1%	21.5%	8.7%	4.7%	100.0%
	駒女大	度数	23	5	8	1	0	37
		所属大学2分 の %	62.2%	13.5%	21.6%	2.7%	.0%	100.0%
合計		度数	87	38	40	14	7	186
		所属大学2分 の %	46.8%	20.4%	21.5%	7.5%	3.8%	100.0%

9　いずれの関連性についても統計的な有意差はみられない。本稿で引用する２つの調査データにおいて対象者の抽出は厳密にはランダム・サンプリングによるものではない。したがって、以下に示す統計的検定の結果はあくまでも参考値に過ぎない。

10　この関連性は統計的に有意ではない。

さら重要なウエイトがおかれているとはいえず、駒女大生についてもその例外ではないが、授業への満足度（質問文：Q13「入学以来、あなたがこれまで受講した全科目について総合的に評価した場合、一定以上の満足感が得られた科目は、全体の何割程度ですか」）を、他大学とのあいだで比較してみると（表７）、駒女大生の場合、授業満足度がやや高い点が特徴的である[11]。

次に、学業以外の諸相についてみていこう。サークル活動への所属の有無を他大学とのあいだで比較してみると（表８）、駒女大生の場合、明らかにサークル団体に所属していない者の比率が高い[12]。

駒女大生の場合、「良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすること」を学生生活の最重点とする回答が高い比率を占めている（27.0％、第１順位）にも拘らず、サークル活動への参加が低調であるというのは、一見して矛盾した傾向であるようにも思える。一般的条件として、サークル活動への参加度は性別によって事情が異なることも考えられる。そこで、本調査の対象者のうち男子学生を除外し、女子学生に限定して比較してみると表９のように示される。これによっても他大学との差異は顕著である[13]。性別ではなく、女子大と共学校の違いが規定要因としてはたらいている可能性も考えられるが、本調査のデータによってそれを検討することはできない。

この点に関連してＢ調査の結果を参照してみよう。表10は、Ｂ調査について女子学生のみを分析対象に限定して、SNS（Social Network Service）の利用経験を所属大学別にまとめた結果である。これによると、駒沢女子大学および東京女学館大学の学生は、専修大学の女子学生に対して SNS

表７　所属大学と一定以上の満足感が得られた科目数の割合のクロス表

			一定以上の満足感が得られた科目数の割合（入学以降の全科目中）					合計
			皆無に近い	4割未満	4～5割	6～7割	8割以上	
所属大学（2分割）	他大学	度数	11	72	38	23	5	149
		所属大学の％	7.4%	48.3%	25.5%	15.4%	3.4%	100.0%
	駒女大	度数	1	10	16	8	3	38
		所属大学の％	2.6%	26.3%	42.1%	21.1%	7.9%	100.0%
合計		度数	12	82	54	31	8	187
		所属大学の％	6.4%	43.9%	28.9%	16.6%	4.3%	100.0%

表８　所属大学とサークル所属の有無のクロス表

			サークル所属の有無（含む部活、同好会）		合計
			はい（入っている）	いいえ（入っていない）	
所属大学2分	他大学	度数	107	43	150
		所属大学2分の％	71.3%	28.7%	100.0%
	駒女大	度数	8	30	38
		所属大学2分の％	21.1%	78.9%	100.0%
合計		度数	115	73	188
		所属大学2分の％	61.2%	38.8%	100.0%

11　この関連性は、10パーセント水準で統計的に有意である（$\chi^2=9.3$，df＝1，$p<0.10$）。
12　この関連性は統計的に有意である（$\chi^2=32.3$，df＝1，$p<0.01$）。
13　この関連性は統計的に有意である（$\chi^2=28.1$，df＝1，$p<0.01$）。

表９　所属大学とサークル所属の有無のクロス表（女子学生のみ）

			サークル所属の有無（含む部活、同好会）		
			はい（入っている）	いいえ（入っていない）	合計
所属大学（2分割）	他大学	度数	64	25	89
		所属大学の％	71.9%	28.1%	100.0%
	駒女大	度数	8	30	38
		所属大学の％	21.1%	78.9%	100.0%
合計		度数	72	55	127
		所属大学の％	56.7%	43.3%	100.0%

表10　所属大学と SNS（mixi など）の利用経験のクロス表

			SNS（mixiなど）の利用経験		
			ある	ない	合計
所属大学	専修大学(女子)	度数	35	41	76
		所属大学の％	46.1%	53.9%	100.0%
	東京女学館大学	度数	20	6	26
		所属大学の％	76.9%	23.1%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	70	19	89
		所属大学の％	78.7%	21.3%	100.0%
合計		度数	125	66	191
		所属大学の％	65.4%	34.6%	100.0%

の利用経験が高いことがわかる[14]。この結果のみを根拠に一般化することはできないが、仮説として、同じ女子学生のあいだでも、女子大の学生は共学校の学生以上に、ネットワーク空間における交友関係に強い関心を示しているのではないだろうか[15, 16]。

同じくＢ調査の結果から、学生生活に関連する諸相をいくつか取り上げてみたい。表11は、消費行動に関するブランド意識について集計した結果である（質問文：Q14「あなたは、服飾・装飾品

表11　所属大学とブランドへのこだわりのクロス表

			服飾品や家電製品のブランドへのこだわり				
			ほとんどこだわらない	一応、参考にはする	こだわりがある	とてもこだわりがある	合計
所属大学	専修大学(女子)	度数	13	49	13	1	76
		所属大学の％	17.1%	64.5%	17.1%	1.3%	100.0%
	東京女学館大学	度数	2	15	8	1	26
		所属大学の％	7.7%	57.7%	30.8%	3.8%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	36	42	11	0	89
		所属大学の％	40.4%	47.2%	12.4%	.0%	100.0%
合計		度数	51	106	32	2	191
		所属大学の％	26.7%	55.5%	16.8%	1.0%	100.0%

14　この関連性は統計的に有意である（$\chi^2=21.0$，df＝2，$p<0.01$）。

15　本調査（Ａ調査）では、携帯電話の所有、携帯メールの送信頻度、携帯電話の発信頻度、携帯電話の利用月額についても設問を設けたが、いずれの回答結果も所属大学間での差異はみられなかった。

16　このほか、駒女大生のサークル参加が体調である原因として、先に指摘した通学時間の長さも関連している可能性が考えられる。

や家電製品などの『ブランド』に、どの程度こだわりをもっていますか」)。駒女大生についてみると、相対的にブランドに対するこだわり意識をあまりもたず、「ほとんどこだわらない」の回答が高比率（40.4%）を占めている点で、他の２大学に対して際立った特徴を示している[17]。また、ブランド品購入に許容する支出金額（質問文：Q16「いわゆる『ブランド品』の購入に、いくらまでなら支出を許容できますか。カジュアルなジャケット１着の購入を例にお考えください」）についても、高額な出費を望まない傾向が窺われる（表12)[18]。これらの結果にみる限り、駒女大生は消費行動に関して質素・堅実な意識をもっているといえよう。

表13は、海外留学への関心度を集計したものであるが、駒女大生は留学に対して相対的に消極的であるといえる[19]。とはいえ、語学力の必要性に対する認識（表14、質問文：Q21「『これからの日本社会では、誰でも、ある程度の外国語のコミュニケーション能力を身につけておくことが求められる』という意見に対して、あなたはどのようにお考えですか」）をみると、他大学とのあいだに差異はみられず[20]、語学力習得の必要性そのものは相応に自覚しているとみられる。

表12　所属大学とブランド品購入の支出許容金額のクロス表

			ブランド品購入の支出許容金額（ジャケット1着）						合計
			～1万円	～2万円	～3万円	～5万円	～10万円	15万円超	
所属大学	専修大学(女子)	度数	14	36	14	5	0	1	70
		所属大学 の %	20.0%	51.4%	20.0%	7.1%	.0%	1.4%	100.0%
	東京女学館大学	度数	4	3	7	5	3	1	23
		所属大学 の %	17.4%	13.0%	30.4%	21.7%	13.0%	4.3%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	20	30	11	5	2	0	68
		所属大学 の %	29.4%	44.1%	16.2%	7.4%	2.9%	.0%	100.0%
合計		度数	38	69	32	15	5	2	161
		所属大学 の %	23.6%	42.9%	19.9%	9.3%	3.1%	1.2%	100.0%

表13　所属大学と海外留学への関心度のクロス表

			「将来、留学してみたいと思うか」		合計
			はい	いいえ	
所属大学	専修大学(女子)	度数	32	44	76
		所属大学 の %	42.1%	57.9%	100.0%
	東京女学館大学	度数	24	2	26
		所属大学 の %	92.3%	7.7%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	34	55	89
		所属大学 の %	38.2%	61.8%	100.0%
合計		度数	90	101	191
		所属大学 の %	47.1%	52.9%	100.0%

17　この関連性は統計的に有意である（$\chi^2=21.7$, df＝6, $p<0.01$）。
18　この関連性も統計的に有意である（$\chi^2=26.1$, df＝10, $p<0.01$）。
19　この関連性は統計的に有意である（$\chi^2=24.9$, df＝2, $p<0.01$）。ただし、東京女学館大学については国際教養学部の学生が対象者である点において特異ケースであるといえる。
20　この関連性に統計的な有意差はみられない。

表14　所属大学と語学力の必要性認識のクロス表

			「これからの日本社会では、ある程度の語学力が必要」				合計
			そうは思わない	どちらかというとそう思う	そう思う	とてもそう思う	
所属大学	専修大学	度数	5	25	33	13	76
		所属大学の％	6.6%	32.9%	43.4%	17.1%	100.0%
	東京女学館大学	度数	1	4	11	10	26
		所属大学の％	3.8%	15.4%	42.3%	38.5%	100.0%
	駒沢女子大学	度数	10	31	27	21	89
		所属大学の％	11.2%	34.8%	30.3%	23.6%	100.0%
合計		度数	16	60	71	44	191
		所属大学の％	8.4%	31.4%	37.2%	23.0%	100.0%

4．社会意識

次に、駒女大生の社会意識についてみていこう。本調査（A調査）では対象者のマナー意識について、電車やバスの車内での携帯電話の着信への対応・飲食・席譲り、駅周辺の路上駐輪などの質問項目を設けて尋ねてみた。それぞれの質問文と選択肢、他大学との比較結果を示すと次のようになる。

Q23：電車やバスの車内で自分のケータイに電話がかかってきた場合、あなたはどうしますか。

1．とくに意識することはなく、普通の声で通話することが多い
2．通話するが、小声で話すようにしている
3．「いま、車内だから」と告げて短めに切る
4．電話に出ない（または、すぐに留守録に切り替える）

表15　所属大学と車内での携帯電話着信時の対応のクロス表

			車内での電話着信時の対応				合計
			普通の声で通話	通話するが、小声で	「車内だから」と短めに切る	電話に出ない（留守録に切替）	
所属大学2分	他大学	度数	0	14	60	51	125
		所属大学の％	.0%	11.2%	48.0%	40.8%	100.0%
	駒女大	度数	1	6	16	8	31
		所属大学の％	3.2%	19.4%	51.6%	25.8%	100.0%
合計		度数	1	20	76	59	156
		所属大学の％	.6%	12.8%	48.7%	37.8%	100.0%

Q24：あなたは電車やバスの車内（行楽地を除く）で飲食をすることがありますか。

1．飲食ともに、ときどきする　　2．たまに飲み物を飲むことはある
3．飲食ともにしない

表16　所属大学と車内での飲食体験のクロス表

			車内での飲食体験（行楽地を除く）			合計
			飲食ともに、する	飲み物を飲むことはある	飲食ともにしない	
所属大学2分	他大学	度数	34	86	30	150
		所属大学の％	22.7%	57.3%	20.0%	100.0%
	駒女大	度数	10	24	4	38
		所属大学の％	26.3%	63.2%	10.5%	100.0%
合計		度数	44	110	34	188
		所属大学の％	23.4%	58.5%	18.1%	100.0%

Q25：あなたはふだん、電車やバスの車内でお年寄りや乳幼児連れなどに席を譲りますか。

1．ほとんど意識することはない　　2．気づかないフリをすることのほうが多い

3．席を譲ることのほうが多い　　4．だいたいいつも譲っている

表17　所属大学と席譲り習慣のクロス表

			「ふだん、お年寄りや乳幼児連れに席を譲りますか」				合計
			ほとんど意識することはない	気づかないフリのほうが多い	席を譲ることのほうが多い	だいたいいつも譲っている	
所属大学2分	他大学	度数	27	33	68	21	149
		所属大学の％	18.1%	22.1%	45.6%	14.1%	100.0%
	駒女大	度数	8	6	17	7	38
		所属大学の％	21.1%	15.8%	44.7%	18.4%	100.0%
合計		度数	35	39	85	28	187
		所属大学の％	18.7%	20.9%	45.5%	15.0%	100.0%

Q26：あなたは、駅周辺での自転車の路上駐車について、どのようにお考えですか。（1つ選択）

1．決められた場所以外での駐輪は、絶対やめるべきだ

2．基本的には駐輪規制に賛成であり、自分もだいたいいつもそれを守っている

3．ついつい指定場所以外に駐輪してしまうことがある

4．駐輪を規制することには反対だ

表18　所属大学と駅周辺の路上駐輪に対する考えのクロス表

			駅周辺の路上駐輪に対する考え				合計
			指定場所以外での駐輪は絶対やめるべき	駐輪規制に賛成、自分もだいたい守っている	ついつい指定場所外に駐輪してしまうことがある	駐輪を規制することには反対	
所属大学2分	他大学	度数	21	69	53	6	149
		所属大学の％	14.1%	46.3%	35.6%	4.0%	100.0%
	駒女大	度数	6	16	13	1	36
		所属大学の％	16.7%	44.4%	36.1%	2.8%	100.0%
合計		度数	27	85	66	7	185
		所属大学の％	14.6%	45.9%	35.7%	3.8%	100.0%

駒女大生のマナー意識を他大生とのあいだで比較してみると、これらのうち、車内での携帯電話の着信への対応（表15）については、ややマナー意識の低い傾向が窺われるものの[21]、それ以外の、車内での飲食（表16）、席譲り習慣（表17）、駅周辺の路上駐輪に対する考え（表18）に関しては、他大生とのあいだにとくに差異はみられない[22]。また、集計結果をみる限り、対象者全体についてマナー意識に危機的な問題が生じていると断じるのは誤りであるといえよう。

社会的価値意識を尋ねた次の設問の集計結果をみてみよう。

Q33：次にあげる考え方についてあなたご自身のお考えをお聞かせください。なお、あなたに該当しないことでも、その立場に立ってお答えください。（それぞれ1つだけ選択）

1．まったくそう思う　2．そう思う　3．どちらともいえない
4．そうは思わない　5．まったくそうは思わない

1）家族の者に多少負担になっても、自分の納得のいく生き方をしたい　「納得の生き方」[23]
2）困っている人が近くにいたら放っておけない　「人助け意識」
3）何かをするときは、これまでの慣習にとらわれずに決めたい　「革新志向」
4）目上の人の言うことには、原則として従うべきである　「権威主義」
5）自分の考えを主張するより、他の人との和を尊重したい　「協調志向」
6）たとえ単調でも、安定している生活の方がよい　「安定志向」

この設問は、生命保険文化センター「生活者の価値観に関する調査、2001」[24]（生命保険文化センター 2002）における該当設問と質問文・選択肢を共通化させることによって、本調査のデータを全国データ（満16～69歳の男女個人）と比較することが可能になるよう設定した。図３～８はそれらの集計結果を示したものである。

まず、他大学との比較についてみると、駒女大の場合、総じて「どちらともいえない」の回答比率がわずかに高めであるものの、「人助け意識」（図４）を除けば、とくに顕著な違いはみられない[25]。

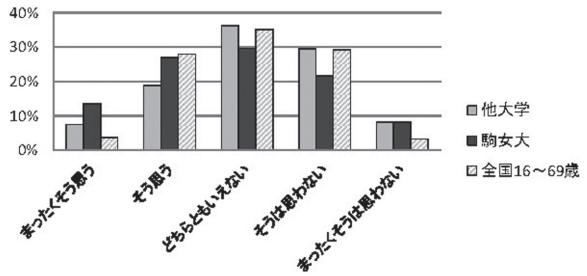

図３　「家族の者が多少負担になっても、自分の納得のいく生き方をしたい」

21　この関連性は10パーセント水準で統計的に有意である（$\chi^2=6.9$, df＝3, $p<0.10$）。
22　いずれも、統計的有意差はみられない。
23　以下、括弧内のタイトルは筆者による。
24　調査主体：生命保険文化センター、2001年７月13～29日実施、調査対象：全国の満16～69歳の男女個人、回収サンプル数18,000票、回収率72.0％。ただし、この調査の対象者は大学生に限定されているわけではない。
25　図４を除く５図に関して、統計的な有意差はみられない。

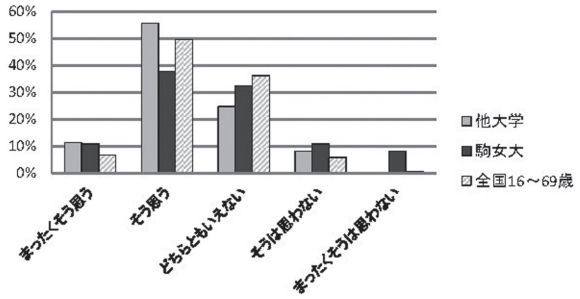

図４　「困っている人が近くにいたら放っておけない」

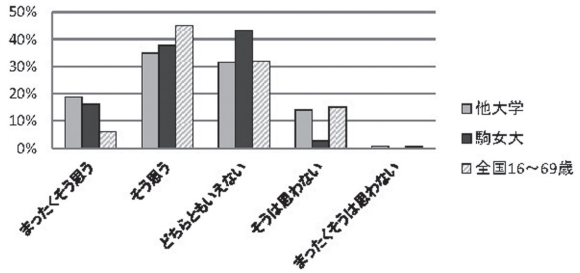

図５　「何かをするときは、これまでの慣習にとらわれずに決めたい」

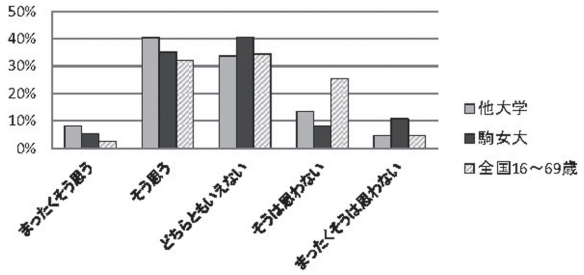

図６　「目上の人の言うことには、原則として従うべきである」

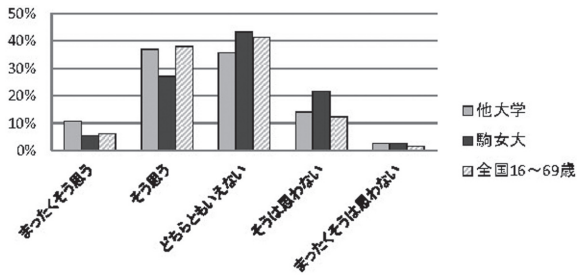

図７　「自分の考えを主張するより、他の人との和を尊重したい」

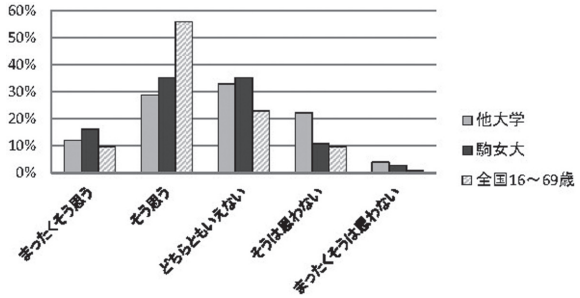

図８　「たとえ単調でも、安定している生活のほうがよい」

表19　所属大学と人助け意識のクロス表

			「困っている人が近くにいたら放っておけない」					合計
			まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そうは思わない	まったくそうは思わない	
所属大学2分	他大学	度数	17	83	37	12	0	149
		所属大学の％	11.4%	55.7%	24.8%	8.1%	.0%	100.0%
	駒女大	度数	4	14	12	4	3	37
		所属大学の％	10.8%	37.8%	32.4%	10.8%	8.1%	100.0%
合計		度数	21	97	49	16	3	186
		所属大学の％	11.3%	52.2%	26.3%	8.6%	1.6%	100.0%

これら６設問のなかで唯一、差異がみられたのが「人助け意識」（図４）である。そのクロス集計結果は表19に示される。回答の順位構成に異同はないものの、駒女大生は他大生に対して相対的に中間的態度を示す傾向がみとめられる[26]。

全国データと比較した場合でも、とくに際立った違いはみられない。全国データでは、「安定志向」（図８）で「そう思う」がやや突出している点が目立つが、これは対象者に中高年齢層や有職者も含まれていることに起因するものと解釈される。

自己に対する自信感についてはどうか（表20、質問文：Q35「自分自身のことを総合的に評価した場合、あなたはご自分に対してどの程度、自信をおもちですか」）。表20に示した結果によると、駒女大生の場合、他大学と比べて回答が肯定-否定の両極にやや分散する傾向が窺われるものの、これらは誤差の範囲内にとどまっている[27]。駒女大生の自信感がとくに低いと結論づけることはできない。

最後に、社会に対する肯定意識をみてみよう（図９、質問文：Q34「『全体として、現在の日本の社会は良い社会だと思う』という意見について、あなたはどうお考えになりますか。次の中から１つあげてください」）。この設問は、生命保険文化センター「若者の生活意識に関する調査、1993」[28]（生命保険文化センター 1993）における該当設問と質問文・選択肢を共通化させることによっ

26　この関連性は統計的に有意である（$\chi^2=14.8$, df＝4, $p<0.01$）。
27　この関連性に統計的な有意差はみられない。
28　調査主体：生命保険文化センター、1993年６月19日～27日実施、調査対象：首都50km 圏の満16～26歳の男女個人、有効回収サンプル数1,188票、回収率59.4％。ただし、この調査の対象者は大学生に限定されているわけではない。

表20　所属大学と自己自信感のクロス表

			自分自身に対する自信感（総合的自己評価）				合計
			自信がある	一応の自信はもっている	あまり自信がない	自分に自信がもてない	
所属大学2分	他大学	度数	8	52	72	17	149
		所属大学の％	5.4%	34.9%	48.3%	11.4%	100.0%
	駒女大	度数	3	11	15	7	36
		所属大学の％	8.3%	30.6%	41.7%	19.4%	100.0%
合計		度数	11	63	87	24	185
		所属大学の％	5.9%	34.1%	47.0%	13.0%	100.0%

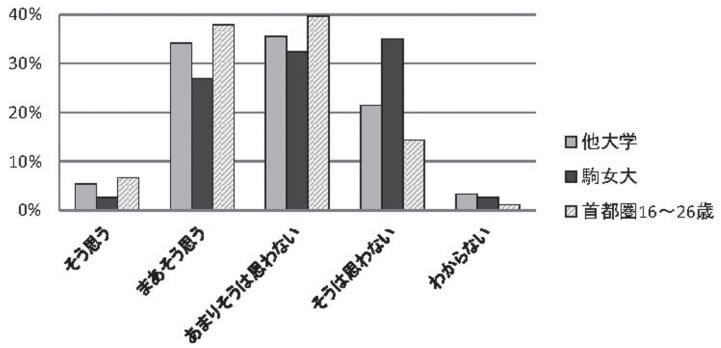

図９　「全体として、現在の日本の社会は良い社会だと思う」

て、本調査のデータを首都圏の若年者データ（満16～26歳の男女個人）と比較することが可能になるよう設定した。図9の集計結果により、他大学との比較についてみると、駒女大生の場合、「そうは思わない」とする否定的な回答がやや高い比率を示しているように見受けられるが、これも誤差の範囲内にとどまるものである[29, 30]。首都圏データについては調査実施年の点で本調査と10年以上のひらきがあるので、これとの単純な比較はできないが、とくに明らかな差異はみとめられない。

５．結語

前節までの分析結果から以下のような結論を導くことができる。本稿が依拠した2つの調査データにみる限り、駒女大生の学生生活に関して、まず概して通学時間が長いことが特徴的であり、この事情は学生生活の諸相に対して根底的な規定要因となっている可能性が考えられる。他大学と同様に、学業に関してことさら熱心に取り組んでいるとは言い難いが、授業への満足度は相対的に高い。大学生活の最重点は「良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすること」にある。しかし、サークル活動への参加は低調である。そのいっぽうで、SNS の利用経験に示されたようにネットワーク空間における交友関係には積極的に参加している。消費生活に関しては質素・堅実な意識をもっ

29　この関連性に統計的な有意差はみられない。
30　表20および図９における他大学との比較に関して、本調査の対象者のうち女子学生のみを抽出して集計しても同様の結果が得られた。

ている。海外留学に対してはやや消極的であるが、語学力習得の必要性については平均的な自覚をもっている。

マナー意識に関しては、車内での携帯電話の着信への対応に関してやや低い傾向が窺われるものの、それを除けば他大生とのあいだに際立った違いはみられない。社会的価値意識や自己自信感、社会肯定感についても、おおむね他大生・全国の対象者とのあいだに顕著な違いはみとめられないが、「人助け意識」については、駒女大生はやや中間的な態度を示している。

サークル活動への参加が低調であるいっぽうで、ネットワーク空間における交友関係には積極的に参加している点、「人助け意識」についてやや中間的な態度を示している点などをふまえると、豊かな人間関係の構築に強い関心を示しながら、現実の社会的対人関係に分け入っていくことを躊躇する駒女大生の典型イメージが、仮説として像を結ぶといえよう。

本稿が依拠した2つの調査データに関しては、サンプル数が十分とはいえず、また、比較分析を試みるうえで対象者の構成その他に検討すべき余地が含まれている。これらの点を今後の課題としたい。

引用・参考文献

浅野智彦編、2006、『検証・若者の変貌』勁草書房

福川須美、1993、「意識調査から見た保育科学生の学生像――保育科学生のライフスタイルの変化Ⅱ」『駒沢女子短期大学研究紀要』第26号、駒沢女子短期大学

福川須美、1994、「意識調査から見た保育科学生の学生像・その２――保育科学生におけるライフスタイルの変化Ⅱ」『駒沢女子短期大学研究紀要』第27号、駒沢女子短期大学

中西新太郎、2004、『若者たちに何が起こっているのか』花伝社

生命保険文化センター、1993、「若者の生活意識に関する調査――集団に対する意識を中心として」1993年11月、生命保険文化センター

生命保険文化センター、2002、「生活者の価値観に関する調査」2002年３月、生命保険文化センター

全国大学生活協同組合連合会、2004、「第39回 学生の消費生活に関する実態調査報告書『Campus Life Data 2003～2004』」2004年３月、全国大学生活協同組合連合会

髙木庸一・渋谷敏章、1997、「女子大生のライフスタイルについて――彼女らの健康への意識と行動 その２」『駒沢女子大学研究紀要』第４号、駒沢女子大学

田中正浩、2003、「現代日本人学生の学習意識――意欲の低下とその背景」『駒沢女子短期大学研究紀要』第36号、駒沢女子短期大学